



# 日化協 新 LRI 第 3 回研究報告会

8月29日(金)、恒例の新LRI研究報告会がベルサール神田にて開催されました。

今年は、LRI 顧問会議の委員をお願いしている淑徳大学の北野大教授に基調講演をお願いしたほか、日化協 LRI としてこれまでほとんど取り上げてこなかった海洋汚染、特にプラスチックごみの問題を特別講演として九

州大学の磯辺教授に解説していただきました。また、午後のセッションでは内分泌かく乱物質に関するシンポジウムを開催し、日化協としての方向性について活発な議論を行いました。昨年を上回る来場者があり、大盛況のうちに閉会しました。

## 午前の部

### (基調講演)

#### 「化学品管理の歴史」(淑徳大学 北野大教授)

DDT、PCB、ダイオキシン類等が環境規制の対象となっただけを振り返った上で、人間環境宣言(72年)、リオ宣言(92年)、ヨハネスブルグ宣言(02年)、ドバイ宣言(06年)の理念を取り入れた我が国の化学物質審査規制法等の将来に向け責任を持って管理する現在の体系の解説をしていただきました。適切な管理を行う上で、簡便かつ高精度の評価方法の要望は高まっており、日本企業が持つデータを有効活用することでQSARを確立するための重要な役割を果たしてほしい旨、日化協 LRI への貴重な提言をいただきました。

### (特別講演)

#### 「海洋漂流ごみ問題の現状と今後

#### ～マクロ&マイクロプラスチックの環境負荷～」

#### (九州大学応用力学研究所 磯辺篤彦教授)

長崎県五島列島奈留島での漂流ゴミをモデルに、広域海流のデータをもとに数週間から1年かけてどのようなルートで流れ着いたのかのシミュレーション等を紹介していただきました。近隣諸国で発生した生活ごみが海流に乗ってたどり着いているという非常に興味深い実態が解明され、参加者からは感嘆の声が挙がっていました。

また、これらのごみには製造時に添加された重金属を含むケースや微細化された粒子が汚染物質を吸着しているケースもあり、今後問題になることが懸念されています。さらに、外来生物の効果的な輸送媒体になっている可能性も指摘されています。化学業界としても共有すべき問題としてとらえていく必要があると同時に、生分解性プラスチック等、問題軽減に向けたメドインジャ

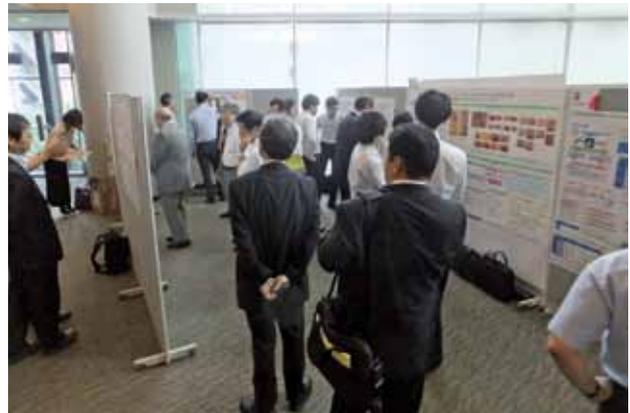


パンの技術力への期待も高まっているとの激励の言葉をいただきました。

## ポスターセッション

ポスターセッションは、現在採択されている課題の研究者と直接ディスカッションをしていただく良い機会となっています。

本年も20課題すべてについてポスターによる紹介を行い、熱心に説明に聞き入る姿が見受けられました。LRIとしての取り組みをご理解いただくという点でも、有意義なセッションであったとの声をいただいています。



## 午後の部

### (シンポジウム)

#### 「内分泌かく乱物質の現状と課題」

内分泌かく乱物質は2000年にICCAのLRI活動をスタートするきっかけになった問題（当時は環境ホルモンと呼ばれていた）です。本シンポジウムは、産業界でこれまでどう対応してきたか、今後どう対応するのか、また新LRIで果たすべき役割が何か、についての議論を行う目的で企画されました。

前半は各シンポジストから、ご自身の研究成果を中心に報告いただき、様々な課題の整理を行いました。井口泰泉岡崎総合バイオサイエンスセンター教授からは、世界的に議論となっている「低用量影響はおそらくある。ただ、それが悪影響なのかどうかは不明。それを調べるためには疫学的調査は必須で、大人になってから出てくる影響も考慮しなければならない。」との提言がありました。青山博昭残留農薬研究所毒性部長からは「動物に供与する飼料には天然由来の植物エストロゲンが含まれており、これが考慮されていない。低用量の影響を調べるにはこれまでの試験方法は適していなかった。」との指摘をいただきました。また、馬場健史大阪大学大学院工学研究科准教授からはLRI課題として取り組んでいる「メタボリックプロファイリングによる化学物質の内分泌かく乱作用 in vitro 評価系の開発」の成果として、ステロイド系代謝物を網羅的に解析するハイスループット法の紹介がありました。内分泌かく乱物質のメカニズム解明のための分析法として、大いに期待されています。最後に、渡辺肇大阪大学大学院工学研究科教授か

ら「ミジンコを用いた内分泌かく乱物質バイオモニタリング系の確立」に向けた取り組みの紹介をいただきました。ヒト型のエストロゲン受容体を導入したミジンコを作成するためのめどをつけたとのことで、今後の成果に期待がかかるものです。

各シンポジストに加え、日化協から庄野常務理事を加えたパネルディスカッションでは「内分泌かく乱作用のメカニズムの解明が急務」「環境影響はフィールド調査の支援も必要」「簡便にモニタリングできるトランスジェニックを利用できれば企業での応用も広がる」等の問題点、課題が提起されました。「研究サイドからの具体的かつ妥当なご指摘をいただき、新LRIとしても今後十分に留意していきたい」ということで、本シンポジウムを締めくくりました。

